

## 復活節後第一主日

「新しき歌を歌おう」

エペソ5:10-20

(1)

今朝は、「光の子」であるものがいかに歩むべきかという問題です。

かなりの以前、玄関先で足のへくるぶしを骨折して、一ヶ月の間ギプスと松葉杖による不自由な生活を強いられましたが、「歩ける」とはこんなにも有難いものかとあらためて知りました。

「歩む」と、「光の子」とされたわたしたちの「歩み方」ですが、

「賢い人のように歩きなさい」(5:15)

「愚かな歩みをしてはならない」(5:17)であり、その理由として

1の節と7の節には、「今は悪い時代である。だから主のみこころが何であるかを、よく悟らなれ」

1の節と7の節には、「むしろ、御霊に満たされなさい。詩と讚美と霊の歌をもち、互いに語り、主に向って、心から歌い、また讚美しなれ」

2の節と7の節には、「こころも、歩むてのこころにむいて、わたしたちの主イエス・キリストの名にむいて、父なる神に感謝をなさい。キリストを恐れ尊んで、互いに従いなさい」この勧めは結ばれていません。

「光の子」の歩むては、心得ておへるべき四つのポイントがあります。

第一は、「御霊」満たされなれ」(1-8)。

横浜の教会のお隣りは酒屋でした。ある時、酒屋の御主人と立ち話をする機会がありました。「牧師さんとは、いっしょにいっしょにやまっていますか。多々々のものが、ソール中となり、酒乱となり、多々の家庭の不幸を見聞きしてきたからではないでしょうか。」

小アジアのエーゲ海沿いに面していたエペソの町は、温暖な地でありました。ブドウの産地としても有名であり、交易が盛んで経済的にも大変潤っていました。しかも、住民は社交性に富んでおり、日常的にブドウ酒を好んでいました。

ギリシャ・ロマの文化の特徴といえば、「Hロス」と「バックラス」とです。

1の節の「酒に酔ってはいけません」と。そこには放蕩があるからです「1-7」の「8」と勧めは、いかにもヘレニズム的な雰囲気を感じますが、酒を飲むものが全て放蕩になるわけではありません。共同訳の「身を持ち崩す」(共同訳)の訳が適当ではないかと思われる。

一時流行った歌があります。「酒を飲むな 酒飲むなのご意見なれど。 酒を飲む酒を飲むのいられるものですか。ちとちとせいのこの意見なれど、酒を飲むなれど。」

「酒は米の滓(かす)の小便にすぎぬはばばはば」と大胆に言ったのは、関西聖書学院の校長・沢村五郎先生です。そのままで露骨にいわね

「も・も・も」は思いますが、仕事を終えるの、先ずは一杯、気がくしゃくしゃするところって一杯、今日はおめでたいからと言って一杯、あれが死んで悲しいところって一杯、最後はわけなく一杯と「も」なす。

エペソの人々は、夜な夜な、酒盛りをして乱痴騒ぎをしていたようです。

エペソの町には、「酒の神バックス」と「女神アルテミス」とが並んで祭られていました。

古来、中国では酒を「甘露」と称して、女性には飲ませてはならぬと禁じていました。

しかし、時代は今や女性たちでも、やれ「ブドウ酒」がいろいろ、「シャンパン」がいろいろ、「日本酒」がいろいろという時代になりました。

「酒に酔ってはならない。それは乱行のもとになる」とあり、それに続いて、

「むしろ、光りの子とされたあなたがたは、むしろ、御霊に満たされなむ」と(108)。

「詩と讚美と霊の歌とをもつて、互いに語り、主に向って、心から歌い、また讚美しなむ」と(9)と勧められています。

「詩」は「詩編」「讚美」「霊の歌」とな、聖歌のようです。宗教改革の時代、「讚美歌」「詩編歌」「詩編歌」を歌ったわけですね。

「互」は「互」の語のあらは仲間とあらは仲間から歌う「とは礼拝におこころの意味だそひますが、それほど厳しく別する必要はない。

私的であれ、公的であれ、「光の子」となれたものは「詩と讚美と霊の歌」をもつて、

互いに語り合い、主に向って心から歌い、讚美すること、が、ますます大切とされます。

「今は悪い時代」であると知れば、なおその賢く歩む「まねはなすませむ」。

(2)

当時の教会は、楽器を手にして讚美する習慣があったようです。打楽器がハーブの類であろうと思われます。しかし、楽器なら何でもよいのです。日本ならば、三味線でも、琴でも、尺八でも良いのです。

教父「テロトリアヌス」は、「キリスト者が夜明けに集まると、楽器を打ち鳴らして、樂に讚美していた」との記録を残しています。

神へ最も喜んでいただけるものと言えば、神への讚美ではないでしょうか。

なかには、なかなか讚美する気にならないと平気でいう人がおられます。それはそれとして、なかなか讚美が口を次いで出てこないのは、

「歌を忘れたカナリヤ」ではないでしょうか。

「讚美は、直き香にふさわし」(詩84:1-11)、「主が良くしてわたしたちを、何し忘れたはならない」(詩100:2)。

聖歌にも、「数えてみよ主の恵み」と歌われてきました。

讚美も感謝もできない時があります。それでも、ために讚美する、ために感謝してみる、不思議と豊かな恵みに満たされていくのを体験して来ました。

わたしは霊的不調を覚えたような時、讚美歌を1番から100番まで、いえ、時には2

〇番、300番まで、続けて讚美する習慣がありました。

良く歌われる「アメイジング・グレイス」ですが、その意味は「とんでもない恵み」・「驚愕すべき恵み」という意味です。

エペソ書一章において、「恵み」とは何かを説明した時、「イレススタブル・グレイス」、  
「不可抗の恵み・抵抗できない恵み」であると申しました。不可抗的な恵みに与っている者が、いつまでも口を閉ざしたまま、押し黙ったまま、主に対して讚美も感謝もなければ、「石が叫ぶ」と主イエスが申されたではありませんか。

ホドホドの時しか讚美できない者は、ホドホドの恵みしか味わえません。それでは、「わが骨は、喜び」と告白した信仰者の心境が分からないのは残念です。

「いつも喜んでいなさい」④テサロニケ5：1。(。)。憂いてはならない主を喜ぶことは、あなたがたの力です」(ネヘミヤ8：10)。

「わが喜び、わが望み、わが命の主よ、屈たたえ、夜歌いて、なお足らぬを思つ」(讚美歌523番)―主は「わたしの歌」なのです。

「使徒の働き」16章25節以下で、パウロとシリウスの二人が、牢屋の獄に捕わられて、むち打たれ、両足に足枷をはめられ、獄に投げ込まれた時、獄の奥で悲鳴を挙げていたかといえ、左にあらす、何と夜中に、大きな声で祈り、ささびいていたというのです。それを見て獄中のすべてのものたちは驚きま

した。たかが讚美ではありません、されど「讚美」なのです。

「互いに語り、互いに歌う」とあります。一人で讚美するのもよいでしょうが、やはり、「共」「互い」「讚美することは、もっと素晴らしいことです。

韓国・釜山の片田舎の小さな教会を訪れた時、何と「聖歌隊」がありました。老いた婦人達が、ガウンを身にまとひ、口を大きく開けて、喜んで讚美している姿は、何とも素晴らしいと思いました。

68歳で奥さんを亡くされ、伴侶を与えてくださいと祈っていると、四国の女性が紹介され、足しげくかよった末に結婚したといいます。長い間、一人でしたから、「共に聖書を読み、共に祈り、共に讚美することが、こんなにも大きな喜びであることを初めて知りました」と証しておりました。

一人で聖書を読み、讚美するより、二人はさらに素晴らしいのです。

「二人は、一人にまさる。二人で労苦すれば、良い報いがくるからである。どちらかが倒れると、一人が相手を支え起します。倒れても、起す人がいない一人ぼっちは、あわれです。また、二人一緒に寝れば暖かです。しかし、一人ではどうして暖かになり得るでしょうか」(伝道の書4：10-11)。

「光の子」とせられたものが、身を寄せ合って讚美する。さらに、もう一人、もう一人と集まり、讚美の輪が次第に大きくなり、つ



むしろ、「主をほめたたえる唇を絶やさぬ者」・「身を低くして絶えず神を讚美する者」を、「一番喜んで下さるのではないだろうか。」

「讚美」がどれほどの意味があるのかといふかるかも知れません。そう申すのは、いまだ、神を喜ぶことを、いまだ十分分っていないからではないでしょうか。

以前、日本政府が神社参拝を朝鮮基督教会に強要したことがありました。その時、殉教したのは、「朱基徹牧師」です。その四男にあたる「朱朝光長老」が来日して証言して下さったことがありました。殉教という名誉だけを残して死んだ父をうらみ、果ては、信仰を見失い、祈ることをやめ、野良犬同然となり、食べるものにも窮し、それでも煙草は吸う、酒は飲むという生活をしていたといえます。

「眞貴鶴婦人」と出会った時、彼は全身はポロポロ、心も荒れ放題でした。ところが、二人は結婚して、共に礼拝に出席すると、もともと讚美が好きであった朝光さんは、聖歌隊の隊長となりました。それでも決して「祈らない人」でした。ところが、讚美指導をしている時、突然、腹の底から「アボッー」という呻きか、叫びが出てきて、祈りを回復したというのです。お目にかかった時は、いつもいつも「コロナ」とほほえみをたたえています。癒やされたのですね。

第二次世界大戦の時、多くの修道士達が逮捕されました。「コルベ神父」もまたアウシュヴィッツ強制収容所へ送られました。その時、

収容所から脱走者が出たのです。脱走者が出ると、連帯責任として一〇人が無差別に選ばれ、刑となることが決まっています。不幸にも、その時、その一人として選ばれたポーランド人が、突然「私には妻子がいる」と叫びながら泣き崩れたのです。その時、そばにいたコルベ神父は静かに前に出て、「私がこの人の身代わりになりましょう」と申し出たのです。

コルベ神父は、彼の身代わりとして牢に入りましたが、パンも水も与えられませんが、ほとんどの囚人は叫び、呻きながら半狂乱になって死んでいくといいます。

しかし、コルベ神父のいた牢の中からは、祈りと賛美が聞こえはじめ、他の囚人たちもみなあわせて歌い始めたというのです。時折、聞こえてくる祈りと讚美によって牢内はまるで聖堂にでもなったかのように感じられたといえます。いかなる時も、絶えず、心からの讚美と祈りをささげるものでありたいと願われます。

#### 【祈り】

父なる神よ、いつもあなたをほめたたえるものとならしめてください。それが光の子とされたもの歩みにふさわしいと示されました。悪性「コロナ」の試練の中でも、讚美することを忘れないものとしてください。

主イエスの名により祈ります。